

冷戦と現代世界

研究者プロフィール

・国際学部 国際教養学科 教授 三須拓也

・専門分野 国際関係史

・研究分野 冷戦史

・所属学会 日本国際政治学会ほか

・学位 博士（法学）名古屋大学

・主著『コンゴ動乱と国際連合の危機』（ミネルヴァ書房、2017年）

共著『冷戦史』（法律文化社、2024年）

共訳 サラ・ロレンツィーニ『グローバル開発史』

（名古屋大学出版会、2022年）

オッド・アルネ・ウェスタッド『グローバル冷戦史』（名古屋大学出版会、2010年）



研究内容

なぜ現代世界は、「中心」の繁栄と「周縁」の荒廃によって特徴づけられるのか。世界はどのような歴史を経て、現在のような姿になったのか—私はこの問いを考えてきました。これまでに私が発表してきた論文は、冷戦期に大国や国際社会が途上国に対してとった政策の内実と、その影響を主題としてきました。今日の世界を見渡せば、先進国・途上国を問わず、政治的腐敗が絶えることなく確認できます。こうした腐敗は、過去の戦争の歴史と無関係ではありません。戦争状態においては、平時とは異なる秩序原理が働くからです。この点は冷戦についても同様です。冷戦は1947年から1989年まで続きましたが、それは平時と戦時双方の特徴を併せ持つ、擬似的な戦争でもありました。その結果、東西両陣営は、直接の軍事衝突を回避しつつも、自陣営・相手陣営の別を問わず、様々な秘密工作を展開することとなったのです。そして、冷戦終結から30年以上を経た現在においてなお、私たちはその熾火（おきび）を、極右勢力の台頭や反国連運動などの諸現象のうちに見出すことができます。熾火は、政治経済の諸制度、メディア、文化など、世界のあらゆる場所に宿っています。本研究では、こうした冷戦の熾火が、どのように現代世界を形作っているのかを考察してまいります。

関連キーワード

冷戦、戦争と準軍事作戦、国際連合と反国連運動

地域・産学官連携の可能性

国際政治から身近なニュースまで、現代世界の動向を、中長期的な視点から理解する術をお伝えできるかと思えます。過去10年以上にわたって、社会人向けの現状分析の講座を担当していました。コロナ前では、月に2回程度のペースで、国内外のニュースの読み解き方などを教えておりましたが、コロナで一時中断後、2024年から半年に1回程度のペースで再開しています。

研究者への連絡先

お問い合わせは産学連携推進センターまで Email srcenter@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

東北学院大学